

## 泉穂の いまとき 恋愛講座……



この原稿を書いてるのは7月6日の夜でも(もちろん1993年の)ほんの数時間前私はとてもショッキングなニュースを聞いたのだった。

私はその悪い知らせのせいでまだ呆然としていて、ある種、自分を見失っているよう感じた。だから今日は『恋愛講座』ではなく、この件について書かせてください。

今から数時間前、晩遅くなつて、仕事から戻った私は、母から電話があった。彼女は一言目にこう言つた。あなた知つてる?

森瑞子さん、亡くなつたのよ。と。

母が私に開口一番こう言つたのは、私が森瑞子フリークだということを充分に知つていて、そしておそらく私がまだこの悲しいニュースを知らないだらうと思ったからだつた。そして、事実、その通りなのだつた。

私はとても大きな声を出したと思う。嘘でしよううまさか。信じられない。とにかく、そういう単語を並び立てた。実際、母はとてもおつちよこちよいで、私には考えられないような勘違いや思い違いをして、周囲を笑わせてくれる人なのだ。

でも、母は今日は勘違いなんてしていなかつた。夜11時のニュースがそのことを私に告げていた。それにして、あれほどまでに健康そのものに見えた人が死んでしまつなんて。

私はたまたま、ほんの3カ月ほど前に、森瑞子さんを直接見ていている。あるホテルで森さんの講演会があつて、私はその広告のコピーを、あるプロダクションから頼まれて書いたのだ。大好きな森瑞子さんの講演スタートのコピーが書けるなんて、と喜んで取り組んだ仕事だつた。

講演の当日、私は一番うしろの席で、ブ

ロダクションの女のコと一緒に、2時間にも及ぶ講演を、なぜかほとんど緊張しながら聞いていた。

彼女は低く柔らかい、けれども張りのある声で、やや早口で喋つた。2時間、ペースダウンすることなく、恋のこと、仕事のこと、女さかりの痛みのこと、友達のこと、青春時代のこと、音楽のこと、とにかく喋りまくつた。

もしかして、あの時すでに、森さんは自分の病気を、癌という恐ろしい病を、知つていたのだろうか? だとしたら、すごいことだ。普段なら、癌の進行を恐れて、少しても死を先のばにしたくて、平穀に暮らしたいと願うものだ。常に最新の看護に守られた状態で。

でも、森さんははざわざ神戸まで出かけ

て来て、2時間も独りで喋り続けた。少しでも多くの人に会つて、少しだけ多くのことを話したかったのだろうか? もちろん、最後まで自分が癌であることを知らなかつたかもしれない。でも、彼女の作品をほとんど読んでいて、ほとんど愛している私は、森さんならたとえ自分の病気のことを知つていたとしても、サービス精神を發揮して、講演で冗談を言い、自ら笑うことができるだらう、と思えるのだ。

それにも。

あの陽に焼けた健康的な肌や、驚くほど

派手な帽子をうまくコーディネイトしたフアッショングや、敏感な髪を気にしないで思いつ切り笑顔を作るやり方などを一皮めくれば、そこにおそろしい病気が巣ぐついていたようには、とても見えなかつた。

ホテルの広報担当者に無理に頼みこんでいる。けれども、とてもおこがましいことなのだけれど、私はあの時、いちファンとしてなんか、森さんと会いたくないと思つたのだ。いつか、私が堂々と作家として名乗れる日が来た時に、必ず森瑞子さんに会いたいと思っていた。本当に、それを一つの目標にしていた。だから、中途半端な今、彼女に会うわけにはいかない、けれどもいつも必ずチヤンスはくるはずだと、信じこんでいたのだ。

私が作家になり損なうことはあつても、まさかこんなに早く森さんが亡くなるなんて、考えもしなかつた。私はとても大きな夢を失つてしまつた。そして永遠にこの夢は失つたままなのだ。

森瑞子さんを、一方的に遠くから見ていた私たつた一度きりの、関係とも呼べないこの関係つきり、永遠に先へは進めない。私は今、これまでの人生で経験したどの失恋よりも手痛い喪失感を味わつている。

## MARUOKA IZUHO

【プロフィール】1965年生まれ。同志社女子大学卒。株電通プロックス勤務を経て、現在コピーライター。広告のほかFMラジオ番組のナレーター。著書にあふれた無邪気が罪になる(PHP研究所)、キスまで、待てない(大和書房)など。

## マンボカーバラダイス

マンボカーバラダイス1  
まつはじめにマンボカーバラダイスは、007のボ

ルマはもしかすると、マンボカーバラダイスがあります。シートベルトが付いていないくらいは、マンボカーバラダイスは当然です。個人タクシーでマンボカーバラダイスの時々見かけますが、そういう運転手さんは、なんにマンボカーバラダイスがあるかもしれません。アルミホイールを付けているマンボカーバラダイスの時は、この世に存在しません。アルミホイールを付けているマンボカーバラダイスの時は、この世に存在しません。だからといって、メッキのホイールキヤップを付けていて、どれもマンボカーバラダイスといふとどうではあります。ディテール

は、今すぐクラブフェイムにクルマの写真を送りましょう。私がみてマンボカーバラダイスの写真には、もれなく素敵な記念品を、これのどこがマンボカーバラダイスか? という手写真を送つてきた人には、それなりのモノを用意しています。ござつてお送りください。深まる謎とともに次号へつづく。

送り先 〒604 京都市中京区六角通烏丸東入ル大輝六角ビル2Fクラブフェイム編集部マンボカーバラダイス係 メ切9・

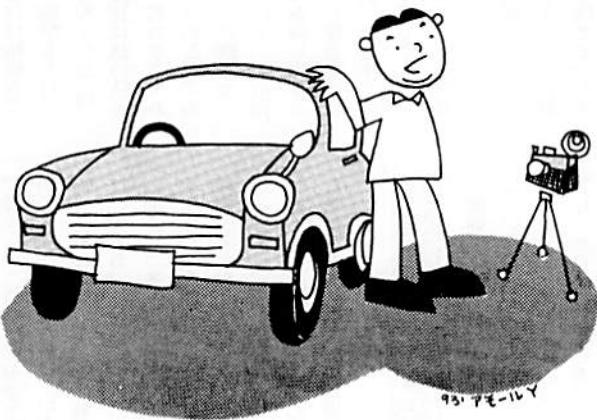
HAP HAZARD  
REMARKS

着だおれ  
京都人に  
送る。

# ササイな情報

⑥

6月号でズーリー・ベーのデザインの方  
向性が、ヒップホップの音作りの手法と同じだ、と書いたのだけれど、それについて多くの人に質問を受けたので、もう少し、分かりやすく説明する。  
音楽もファッションも、新しいアーティストが話題に上るとき、必ずといって良いほど○○のコピーだという意見が出る。ディイケルを取り出して検証する人もいれば、感覚的なところで比較する人もいる。しかし、音楽にしろ、デザインにしろ、もうベースとなるスタイルやアイデアは出尽くしており、後はアーティストがそれに時代性を持たせ、どう処理するかという点だけに作家性の意味がかかる。それをお「このフレーズは○○のコピー」、「この様の形は○○と同じ」という比較で論じても先に進まない。ヒップホップのブレイクビーツ、あるいは



佐藤アモール

ンドカーといつしょでそう簡単に自己にかかるクルマではありません。ですが、映画のスクリーンでしか見られないようなモノでもありません。国産車、外車ともに、マンボカーアリは存在します。マンボカーアリといふ名前のクルマがあるわけではありません。4WDとかRV系のクルマ乗る人によつては、マンボカーダったはずなのに、そつてなくなる場合があります。単純に古ければマンボカーカといふ、それも違います。4WDとかRV系のクルマ乗る人によつては、マンボカーダつたはずえましょう。ボディカラーよつては、多見分けがつく場合もありますが、たゞそれだけではやはりマンボカーカどうかはわかりません。エクセースとか本革張りのシートのクルマはますマンボカーアリではあります。オートマチックのクルマでは、めつたにマンボカーアリませんが、ノーブラチ車とか、サキソマットつきといったク

はハウスのサンプリングの登場が、音楽の手法そのものを変えたように、ファッショングデザインも同じ時代が訪れている。人が捨てたレコードをDJが自らの手で解体し新しいものとして再生する。このリサイクル的な手法をファッショング最初に持ち込んだのは、マルタン・マルジェラだったが、それはあくまでもパリコレという閉じられた環境の中で、評価されたにすぎない。それから、後はアーティストがそれに時代性を持たせ、どう処理するかという点だけに作家性の意味がかかる。それをお「このフレーズは○○のコピー」、「この様の形は○○と同じ」という比較で論じても、'93年の服となつて命を吹き返す。ヒップホップのDJやレゲエのセレクターと同じ

じことしてしまったろうか?

このリサイクルという発想は、日本のデザイナー達も手法として取り入れ始めており、東京ではコム・デ・ギャルソンの渡辺淳弥や山田裕二などが、着物の古切れを使つた作品を発表している。しかし、面白いのは大阪の若いデザイナー達が、既にこのアイデアを2年ほど前から始めているといふ点。東京のデザイナー達ほど恵まれた環境にない彼らは生地屋を回つて、デッドストックの生地を集めたり、東寺や天神さん、四天王寺などの市で古着を販賣、それを解体、再生し、自らのコレクションとして発表している。「ピューティ&ビースト」のデザイナー山下隆生はSAVYの8月号で、INDYやFACEなどのロンドンの雑誌でスタンディングをやつていたアダムと組んで「和

にしたんだんとこだわつてきましたが、マンボカーアリはミシュランタイヤよりも、オーツタイヤかヨコハマタイヤです。無鉛ハイオクより有鉛ハイオク、もしくは、高還元鉛フロアシフトよりは、コラムシフト。コラムシフトでも、握る部分のところが水中花が多いのですが、「クーラー装着車」というシールなんかガリアガラスの左下に付いているクルマは、結構マンボカーアリである確率が高いといえましょう。ダッシュボードの上に、扇風機がついているクルマもマンボカーアリかもしれません。でも、ダンブルカーやトラックの場合のそれは違うと思います。もしこのコラムを読んでいて、自分のクルマがマンボカーアリかも知れないと思つた人

をテーマに作品を発表している。「ピューティ&ビースト」のすぐ近くにアトリエを構える「ベリッシュ」も、今秋冬物で耐火用の、普段は衣料用として使われない素材や、

デッドストックのジャガードの生地を使ってコレクションを仕上げている。

DCブーム以降、東京のデザイナーシンに今一つ活気がない。それに比べると、大阪のこれらの若いデザイナー達の作る服は、完成度、クオリティうんぬんを抜きにして、時代によつて変化するファッショントリックのネタ、あるいはサンプリングとテイストツギングであつたり、実に筋操がして使用されているものの洋服は、アラブ街の'70'sのジャケットであつたり、ユダヤ人街の雑貨屋のセーターであつたり、パンティストックングであつたり、実に筋操が

【プロフィール】1959年京都生まれ。流行通信社・WWDジャパン編集部デスク。東京中心のファッショング情報のなかで、関西に留まり、10年以上にわたり世界の服飾産業を見続けている。91年より大阪コレクションの選考委員として、海外、新人のデザイナーのショーもサポート。

NODA TATSUYA

PARADISE  
YAMAMOTO

イラスト・佐藤アモール陽子  
【プロフィール】元東京パノラママンボーワーズのコンペ委員。富士重工業デザインセンターでレガシイツーリングワゴンやアルシオーネのデザインをしていたことある。趣味で始めた盆栽は、マンボウとよばれ、新しいグリーンアートして全国で個展を開催中。